

『天感楽外妓楽譜』と所載の《師子》についての小考

根本 千聡 (法政大学大学院)

宮内庁書陵部蔵『天感楽外妓楽譜』(以下、本資料)は、唐楽9曲(1曲は曲名のみ)と伎楽10曲(1曲は曲名のみ)を載せる琵琶譜。収載されている唐楽の大半は平安時代中に廃れたと目される曲であり、中には他に遺存の例がない珍しい譜も含む。また、本資料は書陵部のデータベースによれば鎌倉期のもものとされ、この見立てが正しければ、現存最古の部類に入る伎楽譜ともなる。古代から中世にかけての日本での音楽伝承の実態を探る上で、きわめて貴重な資料であるといえる。

本資料は、林謙三「伎楽曲新考」(1969)によって研究の先鞭が付けられて以来、管見に及ぶ限りでは遠藤徹「宮内庁書陵部新出史料『新撰楽譜 横笛三』をめぐる諸問題」(2004)の脚注において触れられたのみで、研究の蓄積はまだ浅いと言わざるを得ない。また、これら先行研究内での取り扱い方としても十分であるとは言い難い。林氏は伎楽譜のみに注目され、その内の《師子》を戸部氏の秘説であると比定されているが、一方の唐楽譜部分についてはほぼ言及されていない。遠藤氏は、伎楽の収載曲目と曲順が『新撰楽譜』の目録と一致することから両資料の関連を示唆されているが、唐楽の問題を含め、それ以上の判断には慎重な構えを見せておられる。

以上のような扱いの要因には、本資料の成立背景の不透明さが挙げられる。本資料は卷子本であるが、後補の表紙が付けられているほかは序跋ともに欠いている。類本もなく、いつ誰がどういった経緯で作成したのかが読み取れないのである。

しかしこの程、2018年2月の当学会例会において遠藤氏によって調査報告がされた書陵部蔵『三五秘抄』の中に、本資料ときわめて近い関係にある資料があることが判明した。本発表では、この『三五秘抄』を元に本資料の成立背景を考察するとともに、林氏による論考が妥当なものであったか否かを検討する。